

「朝鮮半島のシナリオ・プランニング」

【研究概要】

2012年は各国で選挙・政権／指導部の交代が相次いだ「変化の年」であったが、はからずもその「先陣を切る」こととなった北朝鮮においては、金正恩体制の発足から1年あまりを経て、むしろその旧体制の路線への回帰の性向がより明確となっている。特に国際的な関心事である核・ミサイル開発をめぐることは、それをテコに最大の外交目標である対米直接交渉の実現を図るとの政策的思考パターンが受け継がれると同時に、「金正日の遺産」すなわち体制を支えるものとして、さらにそれに対する執着が強まるに及んでいる。一方、主要国・周辺国は北朝鮮への対応において必ずしも一枚岩とは言えず、北朝鮮の核問題の解決の見通しは立たず、日本を含む周辺国への北朝鮮の核ミサイルの脅威は、現実のものとなりつつある。

北朝鮮の核弾頭小型化の進展については不明な点も多いが、今後3～5年が重大な局面であるとも言われる。そのような中で、いかにして核問題の解決を図るか、は日本の安全に直結する緊急の課題といえる。また、北朝鮮が路線の固守を主張し、それをもって後継体制の正統性と強固さの誇示を図る現状は、それ自体が体制に内包された動揺を示唆するものでもある。特に中長期的な視点に立った場合、北朝鮮体制それ自体の動向もまた、日本を含む周辺国の安全と安定に甚大な影響を及ぼすこととなろう。

上記の短期的（3～5年）なタイム・スパンにおいても、またはより中長期的な時間軸においても、日米韓の連携した対応の可否は最重要事項である。たとえば日韓関係、特に戦後の両国関係を50年近く規定してきた「1965年体制」の耐久性についても、特にこの観点からも、目を配る必要があろう。さらに、中長期的な観点に立てば、将来の北東アジアにおいていかなる秩序が生み出されるか、が重要なポイントとなる。そしてその中心に位置付けられるのは、北朝鮮問題における重要なアクターであると同時に、自身が北東アジアの秩序の形成要因となる中国であり、その動向は、日本の安全保障にも重大な影響を及ぼすものである。

このように、北朝鮮の核・ミサイル開発の脅威が現実的問題となりつつあり、なおかつ北朝鮮体制の見通しに不透明感が増しつつある今日、日本の安全を確保するための包括的なシナリオ・プランニングの必要性が、切実に提起されている。また北朝鮮問題を考察するにあたっては、主要国・周辺国間の力学をにらんだ日本の対応を検討する観点も同時に求められることとなる。

本プロジェクトは上記の問題意識をふまえ、金正恩体制の現状を様々な角度から分析し、あわせて、そのような分析を組み込んだ「シナリオ・プランニング」を、短期（今後3～5年）における北朝鮮核・ミサイル問題のシナリオ、より中長期的な視点に立った朝鮮半島情勢のシナリオという観点から実施する。その上で、拉致、核、ミサイルといった諸懸案を包括的に解決すべく取り組んでいる日本のとるべき対応について、政策提言を策定することを目的とするものである。

【研究プロジェクト・メンバー】

全体総括（主査）：

- ・小此木政夫（九州大学特任教授／慶応義塾大学名誉教授）
（「シナリオ・プランニング／提言チーム」リーダー兼任）

分析チーム：

- ・北朝鮮外交分析：伊豆見 元（静岡県立大学教授）（「分析チーム」リーダー兼任）
- ・北朝鮮政治分析：平井 久志（共同通信客員論説委員）
- ・北朝鮮経済分析：三村 光弘（環日本海経済研究所調査研究部長兼主任研究員）
- ・北朝鮮経済（国内）分析：飯村 友紀（日本国際問題研究所研究員）（幹事兼任）
- ・南北関係分析：倉田 秀也（防衛大学校教授／日本国際問題研究所客員研究員）
- ・中朝関係分析：平岩 俊司（関西学院大学教授）

シナリオ・プランニング／提言チーム：

- ・日米韓協力関係：阪田 恭代（神田外語大学教授）
- ・南北関係の動向：西野 純也（慶応義塾大学准教授）
- ・安全保障・軍事：金田 秀昭（岡崎研究所理事／日本国際問題研究所客員研究員）
- ・安全保障・軍事：阿久津 博康（防衛研究所地域研究部北東アジア研究室主任研究官）
- ・中国と朝鮮半島の関係：増田 雅之（防衛研究所地域研究部北東アジア研究室主任研究官）
- ・ロシアと朝鮮半島の関係：兵頭 慎治（防衛研究所地域研究部米欧ロシア研究室長）

委員兼幹事：

- ・浅利 秀樹（日本国際問題研究所副所長）

研究助手：

- ・富田 角栄（日本国際問題研究所研究部主任）